百夜問答

坤

へ5
1003
2

宮内省圖書寮

片歌百夜問答一ニ下

下野足利雨石問

片歌なるべき字音の詞を用ゐ侍べき、或ものゝ
句もまたべはいかゝ

涼曰あの問ふところ、いとゝ其心ゝ、或みるに字音ゝ
更ふ事ゝ異國ゝ詞さゝ人ふ侍りて歌ハおのゝくゝ
字音の歌ともまたべ殊ふ萬葉集十六の巻ふハ
字音ゝ歌なり〻今片歌も其心ゝの風俗を唱ふふ
ゝ侍りてハ字音及び語ゝ或ふ詞をゞ用ゐまゝ
ゝなりとゝれども萬葉より後ゝ詞ゝ中つ世ゝの人

ごとく用ゐるものありもしてちきせ丹洞及びたなあしどもに
よりてとなれで字音あるものゆるすべし字に其字音と
いつてのこの二説問答ゆるもあげつらひしごとく字音に唱ると
いつどを漢語あるもあるべし佛の御国の語あるべし音ハ
すなはち自然朝廷音なれば今音をのひとみとのひ
ともに自然の朝のものとみて並倫ハなるべし

同　漁遠問

遠白ハたいたれのもれなりとのこの歌へばいよく
其心さとしがくやつづしぞあふ三ツのしめ

涼曰ゑを已に人はたあふこへたれどみいとん
俳諧の連歌てあもものもとより連歌ハたれ
ものなり其ハ其ハ連歌ハたれ
徒もちゝ教ゑのこをとて其人ゑ屋をあるハ
附ハ句ふあゝ三句の終ふをゑどいひるとしらを
道ともをへもあげえる人已ふ其まをとすれ
たれで我ハたれのものなりとをはそゝでめて
ゑひおどろくなゝ人俳諧ハ其たれる脇をもて
りあるよてをにあるを陰句ハいあもをくいあも
あゝきゝなどいひつゞ多なるゝ俳諧ふふ

あらぬ所にこうてきをへられるとくいひたらんハ
ひてうぶれど大なる道ちゝみれバ経験ある人も
行ゑ知らぬ人も深にたりれのゆなるいさう拾ひ
中にひろあハひてとちるまるべし

同　斗白問

四段の中にさんてうまる二品助たちりで物
う作りと侍る句ハ在れ流る人まもの二品
たゝざる所ハ接ぶ（ツラヌレト）ちゝ物ちゝ作ること
なる清言も用ゐるゆめや

原曰芽紫を一みいる例まではなりより侍る萬葉
古歌の中ひろき麻中はかり語を拾ひぐなりてみハ
かき物をゝ印なるよ芽の流（ツラヌレト）言なりちハ担乃
毛れ三筋たゝいで人ゆあるべるおもひあるべし
又若流言ハ芽の紫流言なれど今ハいまれ流言を
ゝめてもつぬべきちさなりとてあまりかみれたる
言成用ゆんハ云の第れ道東あるべうるゆハあるる元
あるべきゝすかぞ

同　雲雀皇問

辞世をよむ人人うくするのなりこゝ其志成
あるを抑もれだ一たすれあとをもんあるを
ひへてあのまさをすんを
源日除爺時ゐの後ろいくむとひとすしたいがえる
人もあるへし人れもおれんとする耐其いつのよりなど
おがえなる人もあるんこゝ抑のおるこゝ中小まりせてゐく
なるべりれを一つまゝ小のげつろひがくーまゝ法吹よりへ
ざるもおのの日比れ人ゐまりせて弱る耐のさ海おのく
異なるまどで成るのむ人ハりはゐ中ゆ成仏るあるれハ
業重にのざるくまれゐりのとるの欲をおしゆへるも

あり又日本武命ハ其序太刀れるとおりたまへるや
をもめゐ除のへ小おけるつるきの方抑の方ゐやと
いひをるて嶽ゐまるふれまゐひゆへるとみれざる
るふ弟ゐまて序弥人れ抑せる同様くなり夫ゐ
中おかひて仏り重てくるーきにのゐゐ書つくふを
ゐるゐんゐふまれ其志て其常ふみるこゐれ
服より和ゐ仏りて我志をるくも低くを抑さんと
するるハかふれゐるくハ抑して人るひなるゐを
侍るんかくいるも其人小あるず人ハ傍ゐりハあゐ
つゐひゐるゐるり

同

川夕問

女に男七夕女七夕とあるは何ぞ

なん書のへつらいなん

涼曰七夕と書てたるぞと例る人後の妄なり

七夕と書て毎月七月ともよむすでに萬葉

あハ一年爾七夕乎なぞとよませたり又織女と書て

たなばたづめとよめるぞとありめさるぞといふなんいとと

まりなくをたるぞさい格遠へつたなばたづめとよ

たれどたるぞさめとよいとんいまざかるへつ牽牛を

ひこかりなりまる成今をべてたあぞさといふんを

あまりに語ふれるなり

同

榎雪問

藤の繽紛花ぞ

梅毋ものなる成ぞ

ふれる

涼曰ふれもさまたいなぞ

なりてふふれ世ものなり藤の繽紛と梅毋ハ四に花

ぞより嘉にて陳物ものなりとつるぞ其なるめにふみぞ

これも藤の花の白なり色ハ藤の花の白なり
其句の翻ハいろ〳〵なるべきをかゝるべき
とも書て其ゝ〳〵ひあり家ハ中つ世の例ハ
する成べし

古今集巻上

ゆきまれはごもりの日雨れ降けるハ藤の
ゆきのつゞ白ひて物つる年内ハ幾日もあるゝと云ハ
色花者の俗語なるまゝ第歌集中に杜丹を
ハ見者とよみて書れたゞめに出ハ杜丹花の色
さくぬの句よりいるをいれどすべてゝ

ためなり

同　九山問

バビブベボ行をハ濁なりマミムメモの行ハ半濁
なり其世仮字相通するをうけたまる
ハ〳〵ひふへほ書にくひのるもの
えべをもつハをみなあしゝ其濁るまるべきを
をもなへしゝ本濁の字と見ハ半濁ハみな寺
ういなるなで又萬葉ハ姫押の字ある成
和字ハ正盆の中ハあげて其字の意をもて論ぜ

而ありこハ南るべーや
凉日姫押れ字意をもて論ぜるゆハ契冲れ説よりへ
ども こうがくしまこへーと ゑぶれハ其名をせるなつ
ゝよ あるこび其ハ ハべしの切れなりフリれ切も
又びなりびふりてふとなれば風俗の仮字あて
鄙風俗宮風俗など或ハひふびこやびなどいふみれ
ヒナブリ ミヤブリ
ゐ通ーて ゆ 紀ゆり 世ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ 女風俗 ゆ
ものなれどもみなをお通ずるゆふとりつの
又めーと書ときハメしの切ハうれどみびみ通ずる
とハいへども点ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ

まつへりれとへーのゆ みゆらねハやりげてめれ 岩
濁ふみなるふゆ

同

玄蔡問

神遠り神れ面をなりつゆ多く人れ片歌
ふハいひなつへるうしかく用ゆりるる神
なつきハ諸の神出雲の方社まつひのよ月
るれくかくりゆなりとをまさ或説なりうしハ
え来世説をるりほまりぬなるへーつをにうる
をるりん

涼曰たゝひちまきは江なりとも古代ゝ後ゝ
今まれなりあるものなるハまこゝくるは遠ゝとも
見を詠みて数ゝ伝のうるかしむ言ふ所のものハ
皆て下ゝ面ものなきこゝなり已小世縁問答ふも
詠ゝ俗伝なりと書のへゝ上ゝ後ゝ思ものなるこゝ
はゝ竹ゝ取の例ものゝうて再ゝ思ゝて我ハ浅ゝ後ゝ
ゝ伝ゝ説ゝ赤ゝ月の澄ゝ釋ゝ迦ゝ牟ゝ尼ゝの説ゝ有ゝれゝど雷ゝ
月ゝ天ゝ人ゝなりと侍るゝなるゝこゝろゝ中ゝ言ふ也さゝがゝのへ

上毛一本木

思遠問

四月集ゝ中ゝに林の雛像抄の句ゝ九月九日と
さゝあるゝ加ゝ様ゝ誤ゝ也ゝ

涼曰雛像遊ハ元来雛ゝ祭生ゝ月ゝ已ゝの日ゝの日ゝ
しハ加ゝある説ゝも侍ゝれゝどいさゝゝなるゝこゝろゝ已ゝり
源氏の物語などゝハ雛像ハ未通女のゝ玩抄ハ
なれハいつれの所ゝ中ゝ林の雛像抄ハ是等の
ゝふれるゝ説ゝ加ゝ有ゝ

雛像抄ハ是等の
ゝ説ゝ菓の節ハさなくゝもゝ抄ゝ日なれハゝ
ゝ人ゝ侍ゝへて世日ゝ中ゝ言ゝ
林のひふ抄ゝ中ゝ雛ゝ像ゝ

家を用ゐるハある事小かく侍りしを用ひてとゝ
のゝ

同館林高根

三橋問

無名抄云菖蒲小菖蒲ハ菖蒲の異名
なり其中小菖蒲ハ菖蒲なり蒋の類
あて花あるものの花ゝみよりとゝえそちやゆ
ゆしおもふ小菖蒲を菖蒲とかつもとらゝもゝ
みゝかゝへゝゝみなりゝ蒋みなりゝ
大あ花あり小なるハ四五寸大なるハ七八寸ち

及ひて枯れハ其色黄ばみて稜のごとくなる地を
生ずるなり中ゝなきもあれどなへて花を
とハいとへゝゝゝ
涼曰ゝゝゝゝゝゝ花ゝゝなゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ汲なり色落れ黄ばみたる花
ゝゝゝゝゝゝゝ

あくしきられ池なりに侍るべき歟なり其歟
かくら田の宮小路なるむ宮飯乃人を
見を結び目と云て花ゝてふものゝ
花筵の製造なるべしと也百宮蘇をもて
いるなりさるゝ歟あやめのうちに野なにし
くさむべきたゝひのものゝあるべすべて後の後世花
かつゝのたゝひこと昔歟何名ゝ何ゝ世て
ゝきなれ作り立る後も侍るものゝ歟くゝ
ゝて之ゝてゝゝきるもゝへゝみ後の後ゝ
あゝゝるゝかゝて面後なるものゝゝゝ昔歟

かつゝけすいまきあてゝ出ゝへゝゝきゝとつゝまゝ
ゝゝゝ後の説もゝ面ゝゝゝ歟ゝゝゝゝゝ
あゝゝゝと我ゝくゝみゝゝ

同　雁平門

殘白のゝゝゝゝて天象さゝゝある時盃歟
彩みゝをもて月とする其ゝゝゝゝゝ
涼曰かくけてゝきるゝゝ師なる所をもてあつけしゝる
なゝゝきゝ杯とゝゝゝ其盃物ゝゝて其名異ゝ
腹を盥ゝゝ小腹杯ゝ酒杯なゝ酒杯なゝ

さるハ唯杯の一名ゝり彩ともひろともつきて居れ
名ハ佐るゝ所つきハみれ国なるなふちふ
居れ名ハかゝ居ハ所のゝ名ゝ

同岡野村

十雨問

涙つらゝり涙ハゆゝ袖つゝふ
袖おゝゝ歌をもて十七言なれふゝ下めと
ゝ入ゝ上ゝ腰の句六言なりて上れ
六言とゝて十七言ゝするふや
涼曰さゝるゝハゝ涙つれハ袖ゝ濡れ袖

あゝるゝなり涙ハ行ぶハ六言なりむゝ八四言のまれ
六言れ物ゝ合うゝ行ふものなれハ歌ゝ引き意を
もて詞をゝゝ古詰十九言なるに世序歌のゝゝ
言ハゝ詰りて十七言なれど我見ゝ十七言れ序歌の
なれふゝめゝふ

同

麥央問

ひめゝめてふゝゝあゝりみれ馬我ゝ麥ゝ
あてゝさるゝにいやづれかゝゝ倩るハけでに
るのゝ地めゝ出ゝ行で見なゝまゝ火ハ

くらべめよりも後も侍るこゝろ詠み出でさるべくや
涼曰さいつ比世すぎをいぶりおもひてあまねく問求め
けるを碁道の人ものくまふでく尖ぶのそめをいふと
見異聞れ例をとらるるなりとなる

上毛小泉

眠棠問

茅葉巻の十に鉢ぶかの露おいて咲と
いつどり鳴ぶとて咲まさりしと侍ふ
わらに志ぶめるものを夕張しげるもの
とあるいと

涼曰今り雲牛花ようみる時はいぶり思ふむはこと
りてあるむ あまがりとあるは牛槿なり蕣の字み
本槿の一名なりて夕彩しげるとあり雲牛花は
法れ物なりとそ思ひしを世花鉢毎ぶ沢く物なれを
絶ぶ本槿の名はうぶれて雲牛花名とるれる
なりとそ思ひより紫本槿の和名なれでもく我
むくと唱へきむをかへてくれ詞なるをむくとも唱へ
がりれぶけぶ通ぶ詞をもむぶけといはなへる事で

同

月人問

世に爰恋の句といふありて爰恋は其人の式
ありとこそ聞あるるものを
涼曰爰れ中に歌をあるるものいへらに為く
集中ふるいと多くこれ神意を形ふもの八其心れ
またく神の恵れ歌もあるべく句もつくるおもひて
せまるものい其せまる所ち其心のまにくるみ出ふ
爰れ中の詞もあるべくこれを伝すべきも其人れ
なりに爰なりとも折やづりもみ其人の心をえべれば
信すべくも伝せざるとも唯其人ふあるべみ爰恋びき
なりといふる法れを示ふるべき例を立て教事と

伝へべくするものもあるべみ人ふれを有ぬて伝えるべみ其
人の所ふあるべかつて其ものにかくべくるもみ其人に
あるべ我ふおぬてハあげつらひべく

武本荘

土土宇問

さかひめを其人ふて先まで紅歌みも所
歌ふもあるべさら我ひぬるふ勇ぬのべいう
なるあで
涼曰佐保姫といふものもと我ふてざるべ加なり佐保
姫てふものるき書ふべく元来(モトヨリ)爰恋人う

みもの侍ざりし後の人はいひ始めるなるべし
こゝいろ〳〵の說あれど神の名ことゝいづごとくて
見ぞときこえうるあり〳〵あねど句に作りなん
やうも侍べし時き言をつゝさどる神なゞいとも
畏きものゝ言葉まへばしてみぐりに後代人の迷ふ
つゝんやきりえて後はいふもそら〳〵べきるぞ
きりおかせ

武寄居

雙飛問

源氏の巻に源氏の君左遷のあ和ふ

やつれ給へる事あいとめでたくかけて今いふ
めでたしとハんに異なるべきにあらつくれ
ずむ

涼曰世間のごとく世間のおもてをつゝれバ女に
まさるものなし男ハ眼照れ何よりも又
姿言出る其器語ともいふ行ものせる眼みあや
ひのりとなる事なりさるハいづれのものもめでる
樣のものふかりの屋ものよりて物語のさ海なゞ
かゝれどく源氏の君ハ其きゝくしく
おくりまるが中物語ひとりて痩なりのへふ情

おもちたる物をべりなどめでたるとハヤ有
けりハ痛しれ上畳ゆて痛とハ物の心よう入て
哀しきをりゆ世心をもて書れとにたりれ
須のつきたるをかしげべきとしたまへ

同　久江問

よろづのもれ事を四つの時ふりてるものと
なりて其月をゝへこまるに分てゆ法
するゆわさ物りや
凉曰すでふいへるごとくこれたなるまづしなる

たとへば霧よりふるものを人物れ事とする物ハ物の物と
のみ云て事も多くも物霧ふれども事を
霧とゆて更ふとてしかるべかりて云の樂をもてゝ
霧よりふれ物のづゝ霧とゝたるものハ
多くゝとゆたるものハ人りゆでくいひかれる
まゝ人多り霧ハ水に雨れたハのりてしるゝ
物をりふれ物で物のゝよりんすでに雨樂ハ
事れ野ゆ霧たにらりなどよある源氏物語
なゝにすゝ事ゆも物ゆを霧ふりりなゝ
ゆゝれもまゝさのゝ物ゝ物のたゝ小

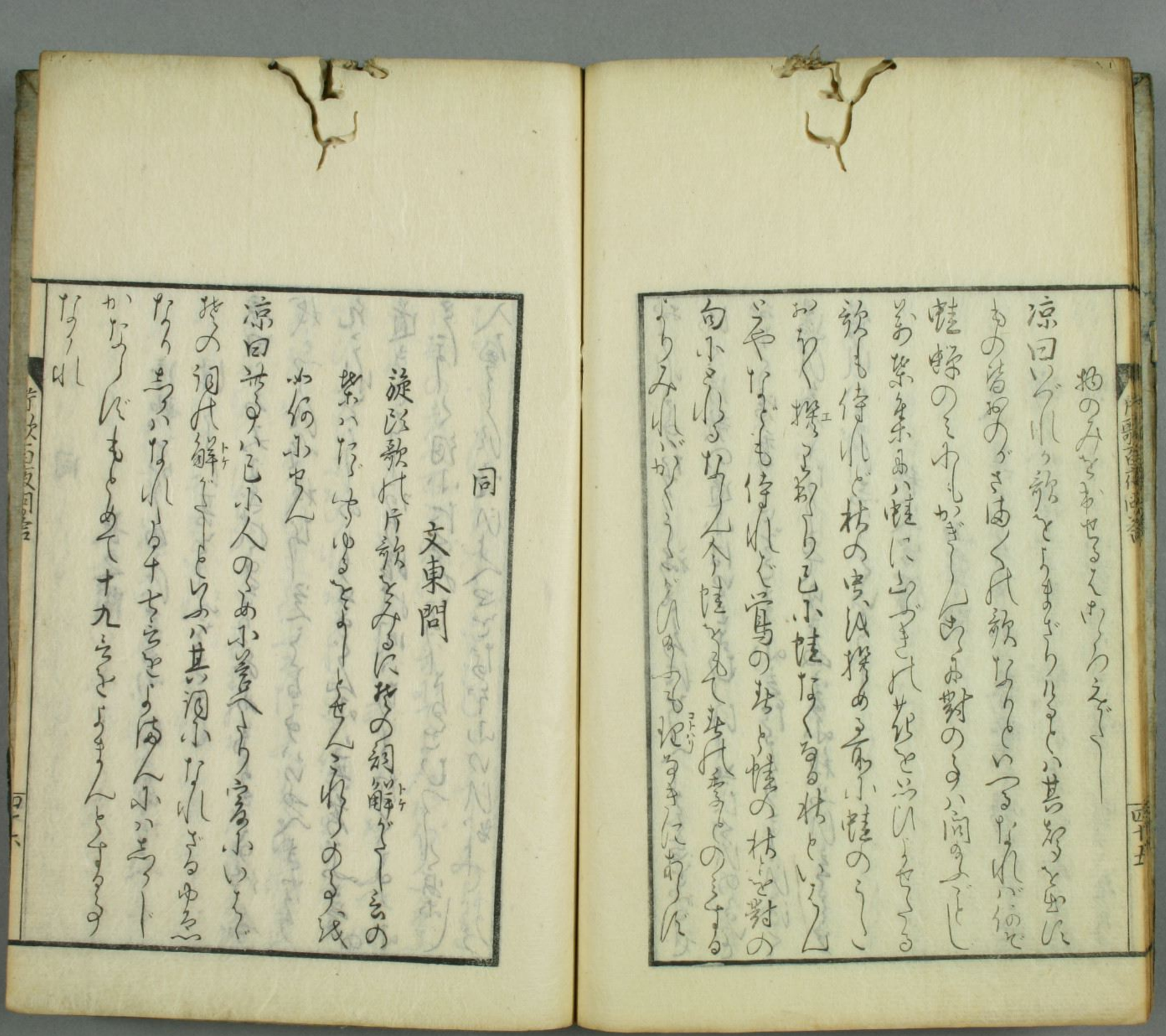
ゐ一時まぐれのるるまに富士の方らくもるこ
とはしぐれくるへなるいきるとへりふ面海るべしや
と問に富士れ方ることにとぐれ侍れば海つるこ
いふふるべきと答へ伐桟付男さぼ人に
つきて俳諧てふするものこなるしが今ぐれと
諧のる川霞なるんと知りでかるるるかき
れど我徒ふ口ざらもどりもるも侍ますと
なもしが腹のるとつひてぐれといるるす
をぞいる今いるるどれいりよくてゆこれ家ひ
るへるはたくへるこれありきるやるべどるるぐざるふい

おもしるるなるとゆもるにやへるるぐ思とおうて
ゆく片歌の道ふはいるるさむるり法たぐれのるを
おわく皆乗るるをるるふえるるるまぐひ深く
遠ひ多くなるるもてゆまあ家ふ桟ふひえるる
侍れハまぐ三ぐくいるぐ

秩父宮澤

山草問

古今集序名序ふ春鶯之囀花中秋
蟬之吟樹上と物ら仮字の序ふ水まむ
蛙とあるるれ對句るるば鶯と蛙と若乃



拍のみちをあせるくせにうえでく
涼曰いづれも歌とうまがらりるとい其節をもひ
ものはなのがさはくれ歌なりといつるなれば伊の
蛙蛙のこゑもかぎりなきあ對のよい向のみごし
ゑの紫条ふ八蛙に山づきれ花をふひとせるる
歌も侍れど枯の実は拵め高小蛙のうこ
おりく拵ゑ初ら已小蛙なくるる枯といこ
ゑやなども侍れど寫の芝と蛙の枯を對の
句小ゑるなり人今蛙ともて芝れ芝ものこゑる
ゑりみれがくうこのつも地(コトバ)をきたあれば

同　文東問

旋歌れ片歌をみるに枯の組解(トケ)ぐ云の
紫ハ花ゆゆるをよ人これ枯のる浅
必何小也人
涼曰芝ものこ小人のあ小言へゑ寫小いこ
枯の組れ解(トケ)ぐゑとゑの八其組小なれざるゆゑ
なゑ言ハなれゑ十七ゑをゑ陶人小ゑこど
かなるべもめて十九ゑをゑゑんゑするる
なるれは

同

長之間

片歌をかゝゐ白ゐに其事ゐるなゐつゐべし

はゐゐに其ゐをゐへときゐし

涼日ゐゐゐ又ゐゐれゐゐゐ

詠くもらるゝ物なりさるをかれこれの
なほ心見れまへあるるあれど人くこれと
めづる物でかるべきもてまとりてむつ〜きるべき
きときるべきもとうべくべうれ片歌の道ふかぎべ
河の道たとへのれごとしてまたるべゆりで
ゆつるとてけへ小業をかれのごきたくみなる
新よ面んともとうゆきうるさうひをうるあに
むつ〜かしばらしよるる物とうるべ〜

同野上
眠郎問

歌ふ対詩を用ゐ短歌の片歌ゆいこれる〜
これいうるあるで
原曰ゆるも彼江ばるめ小奏ずるごとく其るみが
れむかるるるる面のよそわひを作りなすべき
あまりなるされどむ〜入れさ陸ふはばら
さるあふすでに新ばうつくるとるたるべ和
畑さるみなと対を変てよある片歌ありうれむ
十九云の片歌ふ入るむばかるよそ新ふ作るべき

同大宮
未了問

十七言は片歌なやつれなるもすなわち
旋頭歌の片歌ハ作り難しも人ありて
十九言をこゝろ時言つゞけて終すも
なからし世ゝ世ゝ
涼曰よくはあたきこゝろの物なれのゝまゝごと
旋頭歌の片歌ハ古信ふくゝろかぶれはゝ
かゝくゝなるなるこれもすでふいへるごゝ
なるなるといへどもみれ短歌のみれて旋頭歌を
かぶるごゝろなる雅あるゞ問ふはゝに
ゝへぬれど答ふいゝゝ略よく十七言をよこ

べし

同　爲谷問

仲勢物がたりをみるふゝゝゝ孫みゞ小
みゆる新ツ年を入れむすだゝことをゝで
やまふかるゝのいゝゝかゝの禮なきふ似ゝ
ゝれども為あるやゝ
涼曰法歌説言あるまゞ出に入れ説きもていこ
し河ふもゝゝ助信みてをむの意ふあゞ
ゝゝゝの河小祢ゝゝけてゝゝゝゝゝゝ

めふたぐべきれ何ら話とけて己ふよづきて
らみゆるによき算うて話ゞ人物をひ人へ
意をのべらるまでもあゞ心更ふなりさるる
人れ話ゞ人るまをゞおもと異はれいひる色
行たるかれいやなき北へうて話ゞ意なり
今れ人又ふりるすて我ふ妹行ふ己ふさるる
なりたやく算とりて話ゞ人物をたるふ
ゆるもふ取ふ口ゆるをもて来こさる
さる行ゞ来ゞたゞゆふふ弟るる人弟も初ゞれ
なりゞ行ふりゞき云の然ゞうゞなる物をひ

けるれと初ゞれ汨沢若菜をるかけるをけ
次れ行ふりゞきとり汨をおゞみとあるもうゞ
なくも皆其ふ汨れ汨をふり行ふて弟ふかくまでも
行ふゞ来弟をるをよさみたまるふるる
なく活なく物をおぼせゞそのまま言れたる
意なり物ふかふなりてさる汨なれゞ物ふ
りまてなゞ其物活ふれるをひ
けるふ人を物ふるを言ふ物をるひ
我なるをもてよく欲れ言ふさる人ふすふち
況ゞまゞく異腸の妹ふてを五のこゝふある

歌なりとゝ八ゆ〻へのたゆ〻みれ異腸のち
ゝ〻あはとゝぐ〻ら世物ぐ〻らとゝ哀なりとゝて
書るなゝん其落れ源氏の物ぐ〻らほゞもこれ
らになりてみける物なりまゝ世況をとゞりて
とゝゝゝけ徒なく日のれれ道をなみするゝ
けゞぐの人もとゞゝんがゝくゝあの道ゝとゝゝべゝ
自然のむゝれさはなゞゝとゝなりゝれだ
とゞかるとゝゝもなくゝゝきゝみゞゝゝあとゝゝ
今世物ぐ〻らのとゝ況物ぐ〻ゝゝゝゝへの紀源ハ
伊とゝもてゝおゝゝんとゝハあれど今ハゝゝくゝあれ

たゝ小野ふるおゝくなりきてたゝへ異腸なり
ゝもあはとゝくゝゝ道ふゝゝゝゝとゝ見まゝ時ゝと
ふゝへのあはゝゝたゝゝゝ又時なり家とゝてれハ
いゝへれ物ぐ〻らをとれとゝふみるゝゝあゝまゝんと
世況のなゝけれぐ〻ゝゝおゝゝゝをあけていふなり
みゝゝよゝとゝゝおゝゝ況ふゝきゝへ

同金埼

涼戸問

神へなる片歌佛へなる片歌ゝふゝゝ
ありやまゝ海ゝる法も和ふありや

涼曰源の五七例ハ甚るまらくハ長ノ歌ノ
様ニ成ぬ歌あまれ自ハまれ神佛ハ我
意詞ともなるゆかさらハもすまゝなぐさみハも
すまゝいのる心となるやにかいつゝねてまるゆゝ
又況なるゝ自拍常語ハもいつべしちハ行ノ語つ
かきそのあんハ時ハまたく歌ハ自ハもかいつ
ねてなるべくおもゝぐおろ抜らに成ぬるやらに悟て書
もゝんあハ何ぬてめうあんかゝるすにまぐるゝれ

同大瀧

二江問

十七言片歌ハ歌ハまでかゝ人れ来ハ遠
くハ俳諧と唱へなりとも何ぬあんと
さらハいぶるゝ所なり
涼曰かゝゝばるもて我片歌と唱ふるなり也
なぐゝ外ハ俳諧ゝも何ゝも名ハ侍るべきものゝ
五七七ハて十九言五七ハて十七言ハ短歌旋頭
歌の片歌なゝぐて何ぬ和ハまで唱へき
ハ近世ハ俳諧（ハイカイ）とのゝ書也
支考ゝ人偏の西ゝハかゝと見て世人ハ心ハ
なゝ如ハ侍ゝとゝて也もゝるべきなり地ハゝ中に

言俗小かきとりて見ハたれ人のあやまるとも
いふ〳〵への語ハあ〳〵あざ丹なりるどおがえらん人も
えべらずしけりで甚新のつくりたるかけやぶれ
ゆげみて雨もるともこれをつくろひあたむまじ
まてあやまちを人てハすやふあたむべきを
芝道なり

武小山

涼洲問

大人古を学ぶのびのみるるしもこれども所人
皆破を糊解べきを道ふあ〳〵で衆人俳諧

迷ふで仏のぞおれるもて迷ふざる仏れの道
道なるざるとをもて迷ひみさとりなるべし
学師無ぜよ

涼曰こハ徐つの問なれど是を答るに一唱もす
べきが老婆親切小言べし涼ちく甚耳を拭
まれ汝がためにハそふ仏人涼耳を出に我曰
衆人皆ちく能潜なりとすまち我ひらかくてハ
ままにとおもへて涼卯て舞ぜよ

片歌吾嬬風俗 初篇 板行出来

百夜問荅卷二 荅滑稽中興萬葉篇 荅俳諧通夜物語篇 近刻

同 卷三 荅武藏青梅之輩篇 全

同 卷四 與加賀麥水消息同問荅 全

同 卷五 荅東武之輩篇 全

同 卷六 荅信濃之輩篇 全

明和二年酉正月

合梓 參河屋半兵衛

吉文字屋次郎兵衛